

小学校音楽鑑賞教育における プラスチック・アニメの可能性

菅沼 邦子

(2008年10月10日 受理)

Potentials of plastique animée application to music appreciation in
elementary education

Kuniko SUGANUMA

Abstract

The purpose of the present paper is to examine whether or not plastique animée could be effective in promoting children's initiative in music appreciation and also differences in instructional approach would affect contents learned by children in actual classroom settings. It was found that communication, creativity, cooperation, and a sense of achievement were heightened in Class A children who received instructions to focus on imagery and body movement conjured from a musical piece. On the other hand, abilities to analyze music and grasp score reading were marked in Class B children who received instructions to pay attention to the details and components of the same musical piece. These findings suggest that learning through plastique animée is effective in music education, both education-by-music as well as education-for-music. It is thus hoped that application of plastique animée will contribute to the development of music education in elementary schools.

1. は じ め に

スイスの作曲家であり、音楽教育家、E. J = ダルクローズ (1865-1950) が提唱したリトミック教育は、それまでの技術、知識偏重の音楽教育から、精神と身体の調和させることを目指し、そのなかだちを“動き”に見出した新しい音楽教育法として生まれた。そしてこの教育は、のちにその練習方法から、音楽家養成のみならず、幼児教育、音楽療法、舞台芸術などの分野においても効果的であることから、他分野においても発展、応用されてきた経緯をもつ。プラスチック・アニメ (plastiques animée) は、楽曲を分析し、音楽と身体の動きを完全な形で視

覚的に表現するものである。また、観客に“音楽を見えるようにする”ことに意味をもたせた舞台芸術の領域に含まれる（ダルクローズ, 1919, p. 182）。

筆者は、小学校音楽科鑑賞教育において、プラスチック・アニメが、音楽を聴き、表現する楽しさを味わうと共に、音楽を理解すること、すなわち児童の能動的な音楽鑑賞に効果的な役割を果たすのではないかと考えている。本稿は、この点について実践的に検討しようとするものである。指導方法（アプローチ）の違いによって、児童の音楽聴取の姿にどのような変化が見られるのか、また作品理解にどのような変化が表れるのかを比較し、効果的な鑑賞教育を実践するための一助としたい。

昨今、小学校における音楽科の授業、とりわけ鑑賞領域の指導は、従来一般的に行われていたような、座ってCDを聴いたり、感想を書いたりというよう方法（金本, 1997, p. 183）から脱却を図ろうとして、さまざまな工夫が試みられている（江田, 2008, p. 48；高倉, 2005, p. 83）。とはいえ全般的には、学校での音楽の学習方法は、歌うこと、演奏することが活動の多くを占めており、多くの教師は、評価などの面からも音楽鑑賞は扱い難いというのが現状として見られる（音楽教育鑑賞振興会, 2006, p. 50）。また、音楽の授業における“動き”は、単に音楽にのって楽しく動くというようなレベルに留まっていたり、あるいは、パターン化された動きを模倣するだけ、といった実践も指摘されている（佐野, 2003, p. 283）。これは望ましいとはいえない。一方、プラスチック・アニメは、舞台芸術であり、音楽を表現するのに十分な鍛えられた身体を持つ動き手と、音楽を緻密に分析し、それを空間の中で適当な動きに変換できる作り手によってはじめて成立する、と考えられている。こうした点は、プラスチック・アニメが児童にとって難しいと感じられるところである。

しかしながら小学校の音楽教師が、プラスチック・アニメを理解し、その方法（教育の過程）を活かすことは、能動的な音楽鑑賞活動を促し、さらには表現能力を含むところの音楽能力全般を向上するための一助となるのではないかと筆者は考えている。また、プラスチック・アニメの作品作成過程にみられる児童の様々な試行錯誤は、教育的な観点からも価値があると考えられる。つまり、プラスチック・アニメは、幼児・児童の音楽教育に有効な方法になると考えられるのである。本稿では、プラスチック・アニメの可能性について実践的に検証し、今後の可能性と課題を明らかにしたい。

2. プラスティック・アニメ

2-1 リトミック教育におけるプラスチック・アニメの位置付け

ダルクローズが提唱したリトミック教育は、リズム運動、ソルフエージュ、即興演奏が大きい。

な柱をなしている。これらの根底には「完全な音楽学習のためには、経験すること」という理念があり、身体の動き、正確には筋肉感覚をととした音楽学習が大きな特徴である（ダルクローズ, 1907, p. 44）。プラスチック・アニメは、リトミック教育、とりわけリズム運動の延長上にあると考えられる。

ダルクローズは、「リトミックというのは、本質的には個人の経験である」（ダルクローズ, 1919, p. 183）と明言した上で、プラスチック・アニメについて「もし、（形而上学的感情を筋肉の次元で表現する—またはその逆の一変換で）音楽リズムを身体で形に表すことがひとたび成し遂げられ、リトミック者が、その形が外面的なものになり、観衆の目に見えるように働きかけるといふ風にその効果を変えようとすれば、リトミック体験はその性格を変え、芸術的であると同時に、社会性をもった表現というものに変身するのである。そして、身体の力を借りて、音楽的情感や感情の表現の完成を目指すことは、絵画や彫刻のような動かない芸術に対して、plastique animée = プラスティック・アニメとか plastique vivante と名付けてよいあの特別な芸術領域の中に足を踏み入れることなのである。」（ダルクローズ, 1919, p. 182）と述べている。

つまり、リトミックにおける身体の動き、表現は、学習者自身のためのものである。そしてプラスチック・アニメは、このようなリトミックの中で体験した音楽と動きの関係を、自分自身の経験としての学習というレベルから、第三者である観衆の視点から観てみようとするものである。このように視点を変化させることによって発生した芸術領域であると考えることができる。

2-2 プラスティック・アニメにおける音と動きの関係

音楽と動きの芸術というと、一般的にダンスやバレエを思い浮かべる人は多い。しかし、ダルクローズは、「バレエにおける音楽と動きの関係性は、拍とリズムのみである」（ダルクローズ, 1919, p. 185）と述べている。これらとの違いとして、プラスチック・アニメは、情緒から引き出される深い美意識を基に、音楽を目に見えるようにすること、音楽を造形的に再創造すること、としめし、その動きの原動力は情緒、情感であること、をあげている。また、リトミックでの音楽と動きの共通要素として、次の項目をあげ、動きと音楽の深い関係を明示している（表1参照）。

表1 音楽と身体造形の共通要素（ダルクローズ, 1919, p. 185）

音楽	身体造形
音の高低	空間における身振りと位置の方向
音の強弱	筋肉のダイナミズム

音質	身体の形の多様性
時価	持続時間
拍子	拍子
リズム性	リズム性
休止	静止
メロディー	個別の動きの次から次への発生
対位法	動きの対位
和音	連動している身振りの固定
和声の連続	連動している身振りの次から次への発生
フレージング	フレージング
構成（形式）	空間と時間の中での動きの配分
オーケストレーション	さまざまな身体のフォルムの対位とコンビネーション

すなわち、拍とリズムのみを表現するのでは、プラスチック・アニメとは言い難い。また、音楽を聴き、感じ、思うがままに動くというような即興的な動きとも区別されるものである。音楽を形作っている諸要素を分析し、それを空間の中で身体を使って表現することなのである。さらに、ダルクローズは「その目的に対しては、特別な訓練によって、生身の表現に必要な、デザインされた線、秩序、バランス、ダイナミズムの能力、といったものへの内面的感覚を身につける必要があるのである」（ダルクローズ、1919、p. 184）と述べ、見せるために必要な、外的な身体訓練と内的な聴感覚の必要性を指摘している。

2-3 プラスティック・アニメの目的

ダルクローズは、プラスチック・アニメの目的を次のように指摘している。

「リズムによるリズムのための教育は、何よりもまず生徒の心に、次のような心理的・生理的的感受性を目覚めさせることを目的とする。すなわち、生徒に、心に感じた音楽リズムを表現したい、空間、時間、重力の関係についての完璧な知識に鼓舞されたものなら、どんな方法によってでも、その音楽リズムを何とか自分なりに表現したい、という欲求を呼び覚まし、自発的な能力を生むことである。」（ダルクローズ、1919、p. 183）。

つまり、はじめに自分自身、個人の内的欲求、自発性を重んじている。その上で、プラスチック・アニメは、その演技者によって直接経験されるとはいえ、観客の目に直接広げられる芸術である。さらに、「ユーリズムストの印象は、〈動きの感覚〉に特に敏感な観客たちに伝えられるであろうし、造形的芸術家は、自分の印象を公衆に伝えることを目的にしている」（ダ

ルクローズ, 1919, p. 154) と述べ, 自身の経験にとどまらず, 他者に伝えることを意図している。

カルリエ (1977) は, 「ダルクローズは, 造形 (プラスチック・アニメ) を独立した一つの芸術にしようとしなかった。彼はそれを常に, 彼の総合教育の杖の下におこうと思っていた」 (カルリエ, 1977, p. 348) と述べ, プラスチック・アニメの表現芸術としての意味と教育としての意味の2つの面を指摘している。

2-4 小学生とプラスチック・アニメ

小学生の表現は, 舞台芸術表現としてみると, 概して稚拙で不完全であることが多い。また, リトミックにおけるプラスチック・アニメと, 一般的に知られているコレオグラフィー (振り付け) の違いを明確に線引きすることは難しいといわざるを得ない。しかし, カルリエの言葉からは, ダルクローズ自身がプラスチック・アニメの教育的価値を意図したことがうかがえる。このことから, 筆者は小学生によるプラスチック・アニメは可能だと考えている。そこでここでは, ① 生徒自身が自分の中に一つの芸術性を芽吹かせていること ② それを他者に伝えようとしていること ③ 学年に応じた学すべき音楽の要素を, 適確な動きで表現している, という3点をもって, 小学生のプラスチック・アニメと仮定したいと思う。

3. 小学校学習指導要領 (音楽科編) における鑑賞

小学校学習指導要領には, 現行 (平成10年度版) 及び改訂版 (平成20年度版) のいずれにも, 第6節音楽の冒頭に, 小学校における音楽教育の目標, 「表現及び鑑賞の活動を通して, 音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに, 音楽活動の基礎的な能力を培い, 豊かな情操を養う」。が掲げられている。さらに, 指導要領は, 各学年の目標及び内容, 指導計画の作成と内容の取扱いが続く。また, 改訂版では, 2内容A表現B鑑賞に共通事項が加えられ, 表現, 鑑賞2つの領域に共通する指導事項が示されている。ここでは, 実践対象児童3年生に該当する箇所を抜粋する (表2参照)。

表2 小学校学習指導要領に掲げられた目標及び内容より抜粋

各学年の目標及び内容 (第3学年及び第4学年)
1 目 標
(1) 進んで音楽にかかわり, 音楽活動への意欲を高め, 音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。

- (2) 基礎的な表現の能力を伸ばし、音楽表現の楽しさを感じ取るようにする。
- (3) 様々な音楽に親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を伸ばし、音楽を味わって聴くようにする。

2 内 容

B 鑑 賞

- (1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を指導すること。
 - ア 曲想とその変化を感じ取って聴くこと。
 - イ 音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取り、楽曲の構造に気をつけて聴くこと。
 - ウ 楽曲を聴いて想像したことを言葉で表現するなどして、楽曲の特徴や演奏のよさに気づくこと。
- (2) 鑑賞教材は次に示すものを取り扱う。
 - ア 和楽器の音楽を含めたわが国の音楽、郷土の音楽、諸外国に伝わる民謡など生活とのかかわりを感じやすい音楽、劇の音楽、人々に長く親しまれている音楽など、いろいろな種類の楽曲
 - イ 音楽を形づくっている要素の働きを感じ取りやすく、聴く楽しさを得やすい楽曲
 - ウ 楽器や人の声による演奏表現の違いを感じ取りやすい、独奏、重奏、独唱、重唱を含めたいろいろな演奏形態による楽曲

〔共通事項〕

- (1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。
 - ア 音楽を形づくっている要素のうち次の（ア）及び（イ）を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること。
 - （ア）音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、音階や調、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素
 - （イ）反復、問いと答え、変化などの音楽の仕組み
 - イ 音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること

3-1 新学習指導要領がねらう学力

平成20年3月に告示された新学習指導要領においても、2領域（表現と鑑賞）という構成は変わらない。これに加えて「共通事項」として、表現と鑑賞に共通する必要事項が挙げられ、表現と鑑賞の関連性が強調されている。また、「第3 指導計画の作成と内容の取り扱い」の中で、「各学年の「A表現」及び「B鑑賞」の指導に当たっては、音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽とかかわることができるよう、指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること」とされている。これは、音楽体験の重要性を指摘したものと理解することが出来る。また、「B鑑賞（1）ウ 楽曲を聴いて想像したことを言葉で表現する」という記述からは、感じたこと、想像したことを説明できる能力を求めようとしていることも明らかである。

3-2 プラスティック・アニメ導入の可能性

プラスティック・アニメは、その活動から、表現活動と捉えることができる。しかし、即興的な動きを用いた音楽表現、また楽曲に振付をするといった活動と区別するために、今回の小

学3年生対象のプラスチック・アニメの活動では、2-2で提示したリトミックでの音楽と動きの共通要素を、教師が留意して助言・指導することとした。これは、生徒の身体表現に指導の重点を置くのではなく、表現するために必要な、曲想の変化、音楽を特徴付けている要素、楽器の音色を聴きとる力すなわち鑑賞力に重点を置こうとするものである。

4. プラスティック・アニメの実践

4-1 実践の目的

音楽鑑賞の活動にプラスチック・アニメの手法を用いることは、児童が能動的に音楽を聴こうとする態度の育成に有効なのだろうか。ここでは児童の意欲・態度、そして作品の内容の観点から、この方法の効果について検討する。

4-2 実践の方法

- 1) 実施日：2006年9月19日から11月14日
- 2) 授業数：Aクラス 8時間、Bクラス 4時間
- 3) 生徒の実態：K音楽大学附属小学校第3学年、80名（男児10名、女児70名）。実践を行った小学校は私立であり、公立の小学校に比べて音楽系の授業数が多い。課外でも楽器を学んでいる生徒が多く、日頃から音楽に慣れ親しむ機会が多い。
- 4) 教材：サン＝サーンス 動物の謝肉祭より“序曲～ライオンの行進”
 サン＝サーンス作曲の「動物の謝肉祭」は、動物をテーマにした14曲からなる組曲である。一つひとつの楽曲は、約30秒から3分と短く、それぞれが特徴的な旋律とリズムをもっている。それゆえに小学生にとって聴きやすく、またイメージしやすい楽曲であり、鑑賞教材としてふさわしい作品と言える。組曲から“序曲～ライオンの行進”を選んだ理由は、テンポ、音の高低、ダイナミクス、ニュアンスなど、多くの要素において変化に富んだ曲であること、楽器の編成がピアノと弦楽器とシンプルで聞き分けやすいことである。
- 5) 観察の方法：活動中の児童の様子、活動時、発表後の発言、Aクラス：発表後の感想（表3）、Bクラス：鑑賞ペーパー（4-3-2参照）観察記録した。

表3 Aクラス発表後の感想

♪サン＝サーンスの「動物の謝肉祭」から『序曲～ライオンの行進』きいた感想・動いた感想・作った感想
 質問① はじめてこの曲をきいて、指揮をしたり、自由に動いたりしました。どんな風に感じましたか？

- 質問② 次にみなさんが一人ずつこの曲にタイトル（題）をつけ、お話を考えました。このように曲からお話を考えるのはどうでしたか？
- 質問③ 次に3時間目の人は「天使と悪魔」、4時間目の人は「大男の夜」というお話で、みんなで動きを考えました。作っているとき、また作品が出来上がったときの感想は？
- 質問④ 最後に2つの作品を発表しました。発表した感想は？また、他のグループの作品を見た感想は？
- 質問⑤ このように音楽をきいて、動いたり、お話を考えたり、みんなで動きを考えたりすることをやってみてどうでしたか？

4-3 結 果

4-3-1 Aクラスの指導過程

時	学 習 活 動	学習のねらいと留意点
第1時	生徒は体操着で、遊戯室（動くスペースのある部屋）を使用。 1回目：生徒は自由な場所に（床）に座り、目を閉じてCDを聴く。 2回目：目を閉じて、指揮をするような動きで音楽を表現する。 3回目：自由な動きで音楽を表現する。	○曲想を豊かにイメージする。 ・曲に対し、個人の感受ができるよう環境に留意する。 ・感受した曲のイメージを動きでも自由に表現できるよう、空間や服装などに配慮する。 ・恥ずかしいという気持ちや他者に影響されないよう配慮する。
第2時	各個人で、 ①この音楽にタイトルを付ける ②タイトルに基づき、音楽からイメージするストーリーを考える ③発表	○感じたイメージをタイトルをつけることで、言語化する
第3時	前回発表されたストーリーから、1つを選び、音楽とストーリーがわかるよう動きをつける。1グループ20人	○グループで協力して、創作活動をする。 ・教師が介入することなく、生徒同士で話し合いができるよう留意する。
第4時	グループによる振り付け	○グループで協力し、自分の役割を認識した行動ができる。
第5時	グループによる振り付け	○音楽の要素、楽曲の構成とストーリー、動きの関係を確かめる＝ <u>プラスチック・アニメの手法</u> を取り入れる ・ストーリーが独り歩きする傾向にあるグループに対し、音楽は何を表現しているかも一度聴き直すよう示唆。
第6時	グループによる振り付け、仕上げ	○作品を仕上げる ・繰り返すことによって、即興的な部分を極力なくこと。観客からの視点を考慮して動くよう助言＝ <u>プラスチック・アニメの舞台芸術的側面</u>
第7時	グループ発表（ビデオ撮影）	○他者評価
第8時	ビデオ鑑賞、評価、感想を述べ合う。感想文を書く	○自分たちの作品を客観的に鑑賞する。

第1時では、音楽を主観的にとらえる時間の確保に留意した。あくまで、自分はどう感じたということを味わう時間は、あらゆる活動の最初に必要だと考えるからである。2回目の鑑賞時には、即興的な動きの表現がねらいであるが、動きの手立てとして、指揮をするような動きを生徒に提案した。何の手だてもなく、自由に動くのが難しいのではないかと思われたが、「もっと好きに動きたい」という生徒からの意見があったので、3回目には、指揮のような動きでも、自由でもどちらでもよいことにした。即座に動くことができなかつたり、戸惑ったりする生徒はみられず、各々がのびのびと音楽に浸って動く様子、また即時的に音楽の特徴を掴み取って、動く様子が見られた。しかし、例えば序曲でのモチーフがカノンとなつて表されている部分や、ライオンのテーマが変化して表されていることなど、細部までは聴きとっている様子は判断できなかった。

第2時で出たタイトルは「大男の夜」・「不気味な森」・「旅人」・「森で盗まれる」・「風と嵐」・「晴れと台風」・「天使と悪魔」・「天国と地獄」・「海」・「波」・「海賊」・「星たちの踊り」・「音たちの戦争」・「ジャングル」であった。生徒一人一人が豊かな個人のイメージを持っていることがわかる。楽曲のタイトルであるライオンをイメージする生徒がいなかったことも興味深い。

第3時～第4時では、グループで協力しあつて、作品を作り上げることにねらいを定め、可能な限り教師が介入することを避けるよう留意した。これによって、音楽の要素、構成と動きの関係性が希薄になったように思われた。しかしながら、グループ内で活発に意見交換をする様子がみられた。このことは、音楽能力の育成のみならず、生きる力や問題解決能力など、教育全般にかかわる大事な経験の場になっていると言える。

第5時～第6時において、音楽の諸要素や構成に着目するよう促し、曲全体の流れから、曲の細部を取り出し、ストーリーに基づきながらも音楽と動きが一致しているか確かめるよう促した。例えば、『天使と悪魔』で作品を作ったグループでは、序曲は、悪魔が天使の住む平和な世界を侵略しに来る場面である。悪魔役の児童が2チームに分かれ、追いかけるように入ってくるという動きによって、カノンを表現した。また、振り付けが完成してから、即興的な動きをなくすように、繰り返し練習をするようにした。また、第三者からどのように見えるかを意識させるために、鏡を使って観客からの目（客観的な視点）をもたせるよう指導した。

4-3-2 Bクラスの指導過程

時	学 習 活 動	学習のねらいと留意点
第1時	生徒は普段着で机、イスのある通常教室で座つてCDを聴く。3回の異なった指示により、鑑賞ペーパーに以下の指示により記述式で答える。	○楽曲を聴いて想像したこと、感じ取ったことをことばで表す。 ・1,2回目は、聴き方をこちらが指定しないように留意する。

	<p>1 回目の指示：「曲を聴いて、感じたこと、気がついたことを書いてください」</p> <p>2 回目の指示：「もう一回同じ曲を聴きます。1 回目では気がつかなかったこと、新たに感じたこと、変わった印象があったら、書いて下さい」</p> <p>3 回目の指示：「この曲を聴いたことのない人に、この曲がどんな曲なのか説明する文を書いてください」</p>	<p>・生徒が何に焦点を当てて聴いたか分析する。</p> <p>・3 回目は、主観的な聴き方から、客観的な聴き方へと変化させる。</p>
第2時	<p>1) リトミックの手法を用い、音楽を構成する要素について主なものピックアップし、身体の動きによって表現、習得する。 取り上げた音楽の要素：音の高さ・メロディーライン・カノン・リズムパターン・拍・ダイナミクス・速度・音のニュアンス・楽器の音</p> <p>2) 曲（序曲～ライオンの行進）を 1) の要素から分析し、身体の動きによって表現する。</p>	<p>○音楽の要素（拍・リズム・音の高さ・カノン・ダイナミクス・速度・音のニュアンス）について、身体運動により体得する。</p> <p>・楽曲の中で、音楽の要素について理解する。</p>
第3時	<p>楽器ごとの役割で動く</p> <p>1) 曲を、楽器の種類を聞き分け、身体表現する</p> <p>2) スコアを見る</p> <p>3) 4～6人で1グループになり、楽器ごとの役割になって動きを付ける。 ①ピアノ i ②ピアノ ii ③バイオリン・ビオラ ④チェロ・コントラバス</p>	<p>○スコアから簡単に楽曲分析する</p>
第4時	グループ作成、発表	他者評価

Bクラスは、動きを伴わずに聴くことから始めた。初めから生徒に動くことを想像させない普通の教室（椅子に座って記入用紙が配られる状況）で音楽鑑賞を行った。1回目の鑑賞では、アクセントに驚いて歓声をあげたり、イスに座りながらも音楽ののって身体を揺らしたり、手をたたいたりする行動が数人の生徒に見られたが、多数は、大きな身体の動きはみられなかった。第1時での児童の記述では、曲をイメージする生徒と音楽を構成する要素を聴きとる生徒が、約半数ずつであった。聴き取った音楽の要素は、音のダイナミクス、速度の変化、楽器の音などで、大まかな曲想を捉えるのとは違う観点で聴いていることがわかった。

第2時では、授業の前半、楽曲を使わずに、音楽の要素（拍、リズム、音の高さ・カノン・リズムパターン・ダイナミクス・速度・音のニュアンス・楽器の音）について、リトミックの手法による学習を行った。そして、後半では楽曲を使って、これらの音楽の要素について学習した。

第3時では、まず耳で楽器を聞き分け、自分の役割の楽器を動きによって表現する活動を行った。ここでは、生徒が楽器の音を聞き分けるために、とても集中して聴く姿勢が見られた。ある程度、楽器の聞き分けができた後にスコアを見せると、とても興味深く聴きながら目でスコアを追い、全体像を把握した。その後、振り付けの際には、例えば、序曲の最後のピアノのグ

リッサンドの部分や、ライオン〜のイントロ部分のあとの高音と低音の掛け合いの部分など、耳で聞き取ったものと、実際演奏されていることの相違をスコアから発見し、役割となる楽器、また演じる人数を調整するなど、音を正確に表現しようと試みていた。

4-4 考 察

2つの異なるアプローチで音楽鑑賞の実践を行ったが、その結果いずれのクラスにも、ある効果がみられた。第一点は、児童が意欲的に活動に参加している様子がみられたことである。Aクラスは8時間にわたって同じ曲を教材として行ったが、飽きることなく取り組む様子が見られた。第二点は、事後のアンケートにおいて「楽しかった」「またやりたい」などの感想が、全体の9割以上を占めたことである。この結果は、明らかに児童がプラスチック・アニメの作成・表現に楽しさを感じ取ったと見て取ることができる。

アプローチの違いによる児童の音楽聴取の様子（作品にどのような変化が表れるのかを聞き取ろうとしたか）を比較した結果、両クラスにさまざまな違いが表れた。まず、初めにCDを鑑賞する時、Aクラスは、はじめから動く環境の中で、即興的な身体の動きによって表現したことが、音楽の全体像を掴み取ることに繋がったと思われる。また、個々の感性で音楽を聴き、音楽に浸るというような様子が観察された。一方で、Bクラスでは、当初座って聴くという状況であったが、児童は、音楽の構成、音楽の要素、楽器の種類を聴きとろうとする傾向がみられた。

次に、作品を作成する過程での、活動に取り組む様子を比較してみたい。Aクラスでは、終始楽しそうに活動に取り組む姿勢がみられた。また、生徒同士が一つの作品を仕上げるために協力し、グループ内で意見を交換し合うなど、コミュニケーションが盛んに行われていた。発表後のアンケートでは、「いろいろなことが楽しかった。」「とっても面白かった。」「やる気がでくる。」「作るのがうれしかった。」「またやりたい。」「授業が来るのが楽しみだった。」などと記述していた。ほぼ全員が、内容に興味を持ち、楽しく、意欲的に取り組めたことがわかった。活動中の生徒の動きや表情からも、それは充分に見て取ることができた。Bクラスでは、音楽の要素、楽器の聞き分けのために、真剣に楽曲を鑑賞する姿がみられた。また、スコアをみながら、動きを確かめ合うなど、音楽と動きを一致させるために集中して、分析する姿がみられた。発表後の感想では、「メロディーの意味がわかるような気がした」「動いた後、音楽が何もかもはっきりと聴こえた」「よく音がきこえた」と書かれていることから、動きがより細かく、深い聴取の助けとなることがわかった。

プラスチック・アニメの創作（作品）に関しては、Aクラスは、音楽からイメージされるストーリーが動きによってのびのびと表現されていた。演劇の要素が取り入れられ、パフォー

マンス性が高く、見ていてとても楽しい作品であった。また、音楽の要素を考慮して振り付けされているという裏づけが、しっかりとした構成力を感じさせた。同じ教材（曲）から、2グループの作品ができたが、全く違った発想、ストーリーからの振り付けになったことも興味深い。Bクラスは、4～5人でそれぞれが楽器を表現するという条件であったために、各グループが似たような動きになっていた。目を引くような派手な動きや演出はないが、音楽の要素を正確に表現しようとする工夫が随所にみられた。

音楽鑑賞の効果的な方法として、イメージすることと分析することは、どちらの要素も不可欠であるが、学習者の対象年齢、学習目的によって、優先順位を決めるべきであると考えられる。幼児期には、知的理解より前にイメージ活動が優先されるべきであるし、小学校においては高学年になるに従って、味わうだけでなく、理解することが求められていく。その際には、アプローチの順番を考慮することが、学習効果に影響を与えると考えられる。すなわち、分析型で始めた場合には、後からイメージをすることが困難であると思われるからである。

今回の実践において、動きは、音楽の聴き方にどのような役割を果たしたのだろうか。Aクラスで行った、初めの即興的な動きは、音楽（楽曲）全体を瞬時に、感覚的に捉えられるという点で有効であると思われた。また、指導者としては、生徒が何を感じ、音楽の何を聴取したかが、その動きから判断することができた。生徒同士でも、他者の表現を見ることが、自身の表現力を向上させる機会となったり、他者理解につながるという点で効果的であると思われた。Bクラスでは、当初動かないで聴いたことで、音楽の細部を聴きとることができた。このことから、必ずしも動きが音楽聴取（鑑賞）に有効であるとはいえない。しかし、最終的に動きによって表現することを課題にしたことで、動かなければ気づかなかった音楽の細部を聴き取ることに成功したといえる。

これらの点から鑑みて、指導者が音楽の何を聴きとらせたいのか、どんな能力を育てたいのか、その目的によって動きを使い分けること、また動きを活用する場合、そのタイミングを考慮することが重要であると考えられる。

両クラスとも、アプローチは違えども、最終的に楽曲を動きによって視覚的表現するというプラスチック・アニメの手法を取り入れたことで、ただ単に聴く、あるいは、目的を持って聴くというレベルよりも、より積極的に聴くことができた。これが音楽を能動的に聴くということ、ひいては表現活動に結び付いたのではないだろうか。

5. お わ り に

本稿は、プラスチック・アニメが児童の主体的な音楽鑑賞に効果的であるか、また、アプローチの違いにより、児童は何を学習することができるのかを、実践的に検討することを目的としていた。その結果、Aクラスの実践からは、コミュニケーション、想像力、創造性、協調性、達成感などが挙げられるように思われる。また、Bクラスの実践からは、音楽の分析力、スコアリーディング、楽器に関する聴取などが挙げられる。前者は、主に音楽によって備わる事項、後者は音楽のための学習である。ダルクローズは、リトミックを「音楽による、音楽のための教育」といった。小学校における音楽科教育はまさに、この二つの側面を持っている。その意味でもプラスチック・アニメが、音楽科教育の一助となると考えるのである。

感性の教育とされる音楽科教育は、今後、感性の育成と共に、音楽を知的に理解することが求められていく。今後は、この点についても研究を深めていきたい。

引用及び参考文献

- ダルクローズ, E. J. (1919) 「リトミックと身体造形」, 『リズムと音楽と教育』全音楽譜出版, p. 154 p. 182～185.
- ダルクローズ, E. J. (1907) 「リズムへの手引き」『リズムと音楽と教育』全音楽譜出版, p. 44
- 江田 司 (2008) 「こうすればうまくいく鑑賞指導」, 『教育音楽小学版』(4月号より連載), 音楽之友社
- フランク・マルタン, カルエリ他 (1977) 「造形(ラ・プラスチック)」『作曲家・リトミック創始者 エミール・ジャック＝ダルクローズ』(板野平訳), 全音楽譜出版社, p. 348.
- 金本正武 (1997) 『音楽科授業論』, 東洋館出版社, p. 183
- 文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領」, 平成20年3月告示
- 音楽鑑賞教育振興会 (2006) 「学校における鑑賞指導に関するアンケート第2回調査」, 音楽鑑賞教育振興会, p. 50
- 佐野 靖 (2003) 「音楽と動きが開く音楽学習の可能性」, 『リトミック研究の現在』, 開成出版, p. 283.
- 高倉弘光 (2005) 「学校とリトミックー身体の動きは、小学校音楽科のなかでどう位置づいているか」『ダルクローズ音楽教育研究』, 第30号, 日本ダルクローズ音楽教育学会, p. 83